

ロータリー哲学

釧路北ロータリークラブ

PDG 足立 功一

哲学

- Philosophia
- 世界や人間についての知恵、原則を探求する学問。
- 過去は**真理認識の学問一般**をさしたが、次第に個別諸科学が独立し、現在は存在論、認識論、実践論、感性論などの部門に分かれている

ウィリアム・ハミルトン卿の定義

- ウィリアム・ハミルトン卿は、哲学についていくつかの定義をしています。
 - 1.「哲学とは、基本原則から推測される事柄に関する科学です。」
 - 2.「哲学とは、適切な目的に対して推論を適用することです。」
 - 3.「哲学とは、原因による結果の科学です」

ハミルトンと、かの著名なフィヒテは共に、「哲学は科学の中の一分野です」と語っている。すなわち、その他すべての科学の発見から得られた結論を系統的に組立てて、その結果、少なくとも一般の科学によって明らかになった真実を適用する方法を解明するのが哲学の本領

ロータリーの哲学とは？

そこに隠された重要なヒント
はロータリー創世記の出来事
の中にある

1905年 ロータリー創立

一人一業種で親睦

1906年 シカゴ・クラブ定款制定

業務上の利益(相互扶助)・親睦

1907年 シカゴ・クラブ定款改正 (変化)

ドナルド・カーターの入会

社会奉仕の概念の導入

1907年 ポール・ハリス会長就任

会員増強、クラブ拡大 地域への奉仕活動

公衆便所設置運動

社会奉仕活動の実践

1908年 チェスリー・ペリー（ロータリーの建設者）
アーサー・シェルドンの入会
ロータリー理論の（職業奉仕理論）の提唱者

ポール・ハリス会長辞任（第1の危機）
親睦派と奉仕派の論争

1910年 全米ロータリー・クラブ連合会の誕生（変化）
奉仕理念の追求・クラブ拡大

1911年 The National Rotarian 誕生
1月に機関誌第1号
→1912年 The Rotarian

1911年 ロータリー・モットーの採択
一般奉仕概念の制定

1923年 決議 23-34採択

変化

第2の危機 奉仕活動の原則の確立

1927年 目標設定計画の採用

四大奉仕への転換

1934年「四つのテスト」初めて発表

1943年ロータリーで採用

1937～1942年 第二次世界大戦(第3の危機)

加盟国・会員の減少

シェルドンの入会

- **1908年**：アーサー・フレデリック・シェルドンがシカゴ・クラブに入会



職業奉仕概念を提唱

1910年：第1回全米ロータリークラブ連合会年次大会（シカゴ）において、アーサー・フレデリック・シェルドンが

“He profits most

who serves his fellows bestを発表

フランク・コリンズ

- **1911年**：第2回全米ロータリークラブ連合会年次大会（ポートランド）において、フランク・コリンズ（ミネアポリス・クラブ）が“**Service, not self**”に関するスピーチを行う
- 同大会において、アーサー・フレデリック・シェルドンの“**He profits most who serves best**”のレポートが紹介され、「ロータリー宣言」の結語として採択。

その後の変遷

- **1950年**：デトロイト大会で“Service above self” “He profits most who serves best”が公式標語として採択。
 - **1989年**：“Service above self”が第1標語、“He profits most who serves best”が第2標語
- 「ロータリアンの職業宣言」が採択。

性別限定語を削除する件

2001年:「ロータリーの文書から性別限定語を削除する件」の採択に伴って、RI 理事会は“*He profits most who serves best*”の使用を停止としたが、日本からの異議によって撤回。

He  **They**  **One**

現在は“*He profits most who serves best*”が“*One profit most who serve best*”に変更される。

ロータリー哲学

アーサー・フレデリック・シェルドン

1921年発表

その内容を紹介します

シェルドンのロータリー哲学とは

- 人間関係に関する全般的な自然の法則

これが理解されるまでは、奉仕哲学に関する人間の意見も、ロータリー哲学に関する最終的な分析も意見が分れるところです。



- しかし、そのことを表すことは大変難しい。

彼自身哲学を述べることを躊躇している

科学を人間関係や商売に適応

- 「科学」という言葉を人間関係や、特に商工業に適用しようとする、多くの人たちが眉をしかめ、肩をすくめた時代は、そんなに昔ではありません。「哲学」という言葉は、「科学」という言葉よりも更に「知的な」言葉です。

今は製造や配布に関連して、「科学」という言葉を使うことに対する先入観は、ほぼなくなり、今日の経験に富んだ実業家は、「科学」という言葉は進歩をもたらす使者、質や量や経済の母として、一般的に歓迎しています。しかし、科学の信奉者を含めて、哲学を理論的な抽象概念と結び付け、一般的に敬遠する傾向が強いのです。

ロータリーの会員は

- ロータリーの会員は事業と職業人の階層から大部分が選ばれており、もしロータリーがすべての人たちから受け入れられる明確な哲学を持つ必要があれば、それは実践可能なものでなければなりません。
- 実践哲学は、毎日の生活、家庭で、職場で、市民として、政治関係の中で、ロータリアンとしてうまく適用できるものでなければならないのです。
- それは実践可能で、有益な哲学でなければなりません。この事実が、ロータリー哲学を発展させるという私たちの義務と、大きな責任の両者を結びつけるものです。これは私達が現在生きている証として、特に重要な事なのです。

ロータリー哲学はハミルトンの基準に すべて立脚している

ウィリアム卿の言葉を熟慮すれば、私たちは、この言葉を使うことを躊躇する理由がまったくないことが、よく判ります。

もし私たちが人間関係を本来の水準まで高めるために役立とうとするなら、世界中の実業家や専門職種の人たちが、**普遍的な「基本原則」**によって親密さを増し「適切な目的に対して推論」を適用し、**「原因と結果」の普遍的な法則を研究する絶好の機会**です。

そのことを知っているか否かにかかわらず、私たちは、運ではなくて、法則の分野で生活をしているのですから、これらの法律を理解し適用するのは当然のことです。

ロータリー哲学は奉仕哲学です。

- これは、当然のことながら、「超我の奉仕--最も良く奉仕するもの、最も多く報いられる」というモットーの源泉から流れでています。

「ロータリー哲学は奉仕哲学です」と述べるのは、簡単なことです。しかし、奉仕とは何でしょうか。精密な分析をしなければ、「奉仕」という概念は抽象的で漠然としたものに過ぎません。ここでは、ロータリーが根底としている「奉仕の原則」は**自然の法則**、言い換えれば、**調和が取れて有益な人間関係の基本的法則であるという事実を指摘しておきたい**と思います。

- 私たちはこの法則を「原則」と呼びます

奉仕の原則

- 「原則」とは基本的な法則です。

自然の法則を原則の基準にまで高めるためには、基本的または支配的な法則、創造的な法則、同じような一般的な性格を持った他の自然の法則を包含した**自然の法則でなければなりません。**

原則とは、自然の法則であり、自然の法則とそれに関連するその他の自然の法則は、海に注ぐ川の流れのように、最終的には出発点から到達点に流れていくのです。

そして「奉仕」の概念は人間性の法則であり、人間関係の他の自然の法則とまさしく同じ関係なのです。従って、「奉仕の原則」と呼ぶのが適切なのです。

自然

- 自然は、無機物界、植物界、動物界、人間界の四つで表します。

科学は、長い間、これらの三つの低いレベルの世界における自然の法則について、数多くの仕組みをうまく解明して、人間は徐々に支配力を強めてきました。

- 人間はこれらの世界における自然の法則の理解と適用を深めて、支配力を得つつあるのです

奉仕の原則

- 「奉仕の原則」が人間関係の自然の法則であることは、まさしく、物体に対する、重力の法則や引力の原則と同様なのです。
- 以下の事実を指摘します。

1. 空気よりも重たい静止物体は、それを支えているものを取り除けば、地面に向かって落ちてくるのは当然のことです。

2. どんな業種でも、事業は、その生産物を通じて世界に最もよく奉仕している業種の会社に魅きつけられるのは当然のことです。

3. 概して、従業員に最善の奉仕をしている業種の会社に、良質の従業員が魅せられて、魅きつけられるのは当然のことです。

4. 会社に対して最善の奉仕をした、組織に属する個人に魅力を与えるために、昇給や希望する昇進を与えるのは、当然のことです。

- このように、私たちは、奉仕の自然の法則には、いささかの病的な感情も入っていないことが判るのです。それが、健全な経済に関する基本的な法則です。

「自己」「私」「個人」

- 「自己」「私」「個人」は本来、自己保存の願望を持っています。自己保存という自然な願望は、人間性の確固たる原則です。私たちが犯した過ちは、自己保存しようという自然で、唯一正しく、確実な手段を理解できなかったことです。
- 適者生存の法則は、肉体的、精神的な力を利己的に行使して生存する法則ではありません。それは最も奉仕する者が生き残る法則であり、精神力や正義感が、その力を作る自然的要素の一つなのです。
- 最も良く奉仕をした者が、最も良く利益を得、最も良く生き残れるのです。自己を保存する方法は、他人に対して奉仕をすることです。他人に対する奉仕は、自分の利益を確立することです。利己主義は自滅への道です。他人に対する奉仕は、自己啓発と自分の利益を守る道です。
- ロータリー哲学は、その考え方を死守することです。商工業関係における、奉仕の法則の適用と発展の歴史は、非常に面白いものです。

ロータリーのマottoに使われ る言葉

(1)「奉仕」

(2)「利己」

(3)「利益」

という三つの重要な概念の本質

ハーバート・スペンサー

- 倫理学では「利己は利他に優先する」という事実を認識しなければならない

雇用主

- 今や私たちは、雇用主たちが、ごく普通に、奉仕の法則が重力の法則と同じように普遍的な法則であるという事実に関心、雇用主から従業員へだけではなく、従業員から雇用主に適用する時代に入っているのです。
- 雇用主たちは、雇用主から従業員に対する奉仕だけではなく、顧客に対する奉仕も健全な経営であることに関心始めています。すべての雇用主がこの事実に関心しなければなりませんし、すべての従業員も、雇用主に対して奉仕すべきであることに関心しなければなりません。炎を弱めて、より多くの熱を期待することは、理論的に不可能です。それは自然の法則に反することであって、不可能なことです。
- この簡単な、しかし、最もすばらしい事実の普遍的な適用は、商工業関係の財政的均衡と経済収支に関する傾向として、直ちに開始されるに違いありません。しかし、この法則の適用は、自然で普遍的なものとして認識されなければなりません。雇用主だけがこの法則の適用を強制することはできないし、従業員も同様です。双方が、お互いの関係に、それを適用しなければなりません。

ロータリー哲学は、財産権と政府の権利を断固として支持します。

世界中の雇用主のあらゆる権利、恩恵、特典を支持すると同様に、世界中の従業員のあらゆる権利を支持します。

- この件に関しては、いかなる種類の「権利」であっても、ロータリー哲学は、ゆるぎなき基本的な事実に基づいているのです

真のロータリアン

- 真のロータリアンならば、個人や会社や国のすべての権利や恩恵や特典は、単なる結果か、まぼろしに過ぎないものであり、これらの権利が創造された自然の方法である、自然の義務や約束や責任を欠けば、その実在性はまったくないと、主張するのです。
- 世界中の雇用主や資産家が、他の人たちの財産所有権と雇用に伴う彼らの完全な自然の義務、約束、責任のすべてを実現させるなら、自分たちの完全な自然の権利、恩恵、特典の取得と保全について心配する必要がなくなるのです。

- 科学の光が人間関係の問題に投げかけられ、適用されたときに、初めて、文明は進歩し、神の意図する目標である完成に向かって進むでしょう。
- 奉仕哲学が、「**原因と結果の科学**」として、究極に上り詰め、**奉仕の原則という源泉から流れ出る時**、ウィリアム・ハミルトン卿による哲学のもう一つの定義と一致する、次の定義をさらに引用しても、さほど大きな非難を受けることはないでしょう。

- 「哲学は、神と人間と両者を含んだ原因の科学です」
- 奉仕哲学は現実には「原因と結果の科学」

取引

- 取引をする人たちに対して、最善の奉仕をすれば、精神的な価値だけでなく物質的な利益においても、最高の「利益」を得ることができるのです。商売の上で、顧客に対して優れた奉仕をすることが、**永続性を保ち、従って利益を累進的に与えてくれる顧客を確保するための唯一の方法なのです。**それはまた、尊敬を確かなものにし、「安眠」を可能にする気休めを確保する唯一の方法でもあります。
- 人生は海のようなものです。ギブ・アンド・テークの絶え間ない潮の満ち干が、物事を解決します。
- 「与えること」が奉仕であり、「受け取ること」が利益または報酬です。しかし、種を播く時期が、収穫に先行するのと同様に、与えることが、受け取ることには先行しなければなりません。**

利益を得る科学は、奉仕を与える科学

- 今日、全世界にわたって広範囲に広がっている経済的、社会的な混乱の原因は、人類の大部分が、人間関係の基本的な法則を破ろうとしているからです。
- 私たちは人類として、与えるのではなく、得ようとしています。それは結局、人類すべてを破滅させるか、少なくとも文明を破滅させて、精神的な暗黒時代に逆戻りさせること無しには済まないのです。
- **今こそ、方向転換する絶好の時期です。**

以上の事実を考案した結果として導き 出される結論は

- 私たちは結局楽観的でいいと確信しました。真のロータリアンは、いつも楽観的です。しかし、責任を回避する時間はありません。皆が、喜んで積極的に、大胆不敵に、この事態に直面し、法則の光が導く場所に赴き、本分を尽くすべき時です。商工業界や政界の大釜の中で起こっている、全世界的な「混乱」は、次の三つを強く示しています。
 1. 自然の法則の違反による人種の破滅。
 2. エジプトやローマの滅亡に見られるような、精神的な暗黒時代の再現や不況。
 3. 新しい、より良い時代への人類の再生。

シェルドンの言葉

- もしも人間が、愚かにも、神が創った法則に逸脱して、自らの人生の平和な川の流れに滝（苦悩）を作っても、その人がすべきことは、人間としてそれを受け止めるだけでいいのです。神は荒れ狂う奔流を鎮めてくれるのです。もしもあなたが、如何なる時でも如何なる場所でも、神の許しを乞い、神の命令に従って神の愛に値する行動を取るなら、神は、正義の荒々しい岩の壁からあなたを守り、平和な川に戻して、あなたの力を再び蘇らせてくれるでしょう。

- 皆さん、人生は運ではなく、法則なのです。そして、法則はすべて神が創ったもののなのです。正義は力の源です。
- 過ちから脱却するには、そんなに時間はかかりません。もし、あなたの人生が困難に巻き込まれたら、あなたが行った過ちを見つけてください。決して他人のせいにしてはなりません。恐れてはなりません。正直で、忠誠な人間になってください。良心の声があなたにはっきり告げる場所に従って、常に忠実で、真実な人間になってください。これこそが、「急流を乗り切る」方法であり、「滝」を作る方法であり、「渦」を鎮める方法なのです。神の法則に留意してください。そうすれば、あなたの人生のすべての流れは、すべての人生が最後に到達しなければならない、海への道に向かって流れていくのです。すべての海の中の海に、誰も見ることの出来ない海に、未来の海に、正義という荒々しい岩の峡谷を通った、あなたの力を修復し、あなたの力を再び蘇らせて、「永遠」という海への道に向かって・・

シェルドンのその後

- シェルドンは1921年この「ロータリー哲学」という論文を発表して、これを最後にロータリー世界より姿を消し、1930年にシカゴ・クラブを退会しました。そして1935年に亡くなりました。

1923年に採択された決議23-34は、シェルドンとロータリーとの関係を決定的に壊しました。それは、経営学としての学問的裏付けのあるHe profits most who serves best と、単なるはやり言葉に過ぎないService above self が対等の立場でロータリーの奉仕哲学として採択されたからかもしれません

- その後は毎年のようにHe profits most who serves best を廃止して、Service above self をロータリーのモットーにしようという決議案がイギリスから提出されましたが、その都度否決されて事なきを得ています。

- つまり、1930年代からService above self の持つ意味合いが「他人のことを思いやり、他人のために尽くす」という意味に変化し、人道的奉仕活動を指すモットーに変化していきました。

- ロータリー哲学の中心的な理念である
シェルドンの提唱したロータリー哲学
- “He profits most who serves best”は今や
魂を抜かれた存在となり国際ロータリーの
**歴史の上からはService above selfという
人道的奉仕を指すモットーが第一標語に
変わりました。**

- このようにして今日では ローターリーのあらゆる活動が

“ Service above self ” という第一標語が主の人道的奉仕活動となっているのが現実で、**ロータリーの奉仕理念は職業奉仕から社会奉仕に変わって行ったのです。**

チェスリー・ペリーの言葉 国際ロータリー初代事務総長

- “Thoughtfulness of and helpfulness to others”

『思いやりの心をもって他人のために尽くす』

「他人のことを思いやり、他人のために役立とうとすることである」

と定義されています。

ロータリーの哲学を最も適切に表現

- “He profits most who serves best”『最もよく奉仕する者、最も多く報いられる』という言葉はこれが即ちそのままロータリー哲学を最も適切に表現した職業奉仕の言葉だと思います
- また、“Thoughtfulness of and helpfulness to others”『思いやりの心をもって他人のために尽くす』という言葉は社会奉仕の理念を表す言葉である

親鸞(浄土真宗の開祖：鎌倉時代)

- 親鸞の教えに「自分の利益として極楽浄土に行くのは「自利」であり、他の人々を救うためにこの世に帰ってくる事が「他利」である」という教えがあります。
- この「他利」の心こそ人間に無くてはならない大切な精神であると言えるでしょう。

梅原 猛 先生

- 良いことをするためにこの世に生まれてきたことは、人間としてきわめて大切なことです。

「神が、人をこの世に
使わされたのは地上
で奉仕を実践する」
為ではないでしょうか

終了